娘の美

十二

口 g
1550
12

1550
12

吾鑑紀行卷第十

紀伊

二位禪尼 盛衰記 東鑑

中納言局 同上

大蔵卿局 右平記

渡河將軍妻 同上

名越氏之妻 同上

佐介貞俊妻 同上

菊池武時妻 同上

山名氏清妻

慶寿院尼
高野七帝妻
武田錦教妻
菜田義盛妻

吾妻鏡紀行卷第十

紀行第十　山ゝ寺十八のまた九市の宅なり

筭相國清盛公の夫人二位尼名い時子贈太政大臣時信の
うむところ安徳宮の外祖建礼門院の母たり相ゝ
おくれてほうさうもうして二位尼とぞれより元暦
二年三月廿四日長門の赤間関にて海に入ぬ
筭るまでよりけるあなりける
汚ゝまいり世の中いかうるしぐるしさの
とゞもこゝ海よの底にて
ら世うれしく女房こゝろ

うねてありくるまもれがよぶなの三りざまよ絵巻のそこたろ
くばさみ我が妻のもとこもうこれのゆへからでもの法とも
うそてまつるのりんぎしありくへつきまつて神霊験
和をしらみを八巻まやせのをそぐさくまいくせてあ
ぐそよこれこれをかくへぐてゆぐそ修行をそれ
さくくあいろうめさぐやけぐこあるさせのなるひよ十悪の
法果報をつきこそさうぐうしてゆくもたふ
やぐうしふむひうくせのひくて天眼を神よれいをあひさせさ
まへうおちおよひうくせのふいて仏の慈悲のあつくせのふ

ぐしけふ八栗散弁地うしてんうれさうひうてうで松
永浄もうしてめぐこさふれよ筆をしてまうんうの
されうをみうぜをさうくせのひくふれうで二仕奉
せてまうひうれど二仕奉
いまそうこをすうりのなうれなうのそこみもこ
奉しまりとやのひすそくみてうりふ海よりのかう
称宗仏のつぐひでれやそまうわけうぐ房八ふさまぐう
当てうれどみうぐくこ仕奉ふつのようまづこそさせのひ
をわ女院もつぐこそ男をうげをのをうを源氏の武
若うつあげまつうせふぬうてなぐうぬ

ゆゑそのそれらふ盛の大石六平氏の大おもてあわ
らうがはこのへうやしきものゝまゐり二位局(つぼね)懐妊(くわいにん)の
とき祖母(そぼ)ものこをおぢくれくるよしをあとしまれらし
うべおもうふうふうへしなわ山ぢで二位局(つぼね)くへもか
きうつのひくさうあやおぐひのやまもをそれる共ものを
なひやをでこまをんどこてうくやんとこりぐあのご
とくひさべ二門のへくふ自宅(じたく)ものけうよひおぐ
なんをもるどこてうひごもあこりひ
てふねりつきおくこづうもどつを
そのよた底(そこ)清宗(きよむね)とうとこれて大臣(だいじん)をうと
かまくらのむれてほよくひとうされゆうり軟弱の
下知(げち)よはみくぐなるびかに位局(つぼね)下の女房(にょうぼう)うと
うもあさゆるうてむへとうべしかくとだ
ものさうへべに位局(つぼね)といざれまいもてこれ
さゆよおうるまあるべしおくべきあて猿楽(さるがく)な
此人(このひと)をまごべうを自害(じがい)生捕(いけどり)よくへし
とうりそてそてでいふおあよおうれど二位局(つぼね)を
おりしのかうへくまさくうごとりふむる
そうくるまうこそゆくうれ
又四郎(またしらう)ごにな之位中納言(ちうなごん)の高(たか)よ中納言(ちうなごん)のつぐ

ありてはかなのまひわりけるは、碧のやくみて
青海波をうんじもろよ百里小紋中納言房もおう
ひろうめもりひつきてはつみよ一枚のちぎりをむ
をびもわうこれうそのつぎ方枕上はごろのほろぐ
ておくらんおくに枕おりて勧めおりひと
たち小袖房ももはともよの本くれろぐこの女房かる
ぐりおうさそのすみそ西の屋よゆきそれがとる
中そめわりてお山屋へもりおり袖房ひんのうみをに
きりてこのをうきそへてをさそう
ろうのこれ世をてうこれをいうこのう

ありてこれをみてもんうりてこれをえてなげこ
ろめりおうるうそうりおしおさめぬそづこれ
おくれとおくびおうちうそひとそのさた
うふおおうものとおりてひつきそれおよまのりてひつうの
袖をさにうなくおそのえんをうるこもいで
そうくさおもりくれがこそいうかう
ぞそのびてまいんこいつうりてこう
このうでう
うれをそうまうこまうえてのうれ世うて
ろうこそやんこそこのうみを納よ

いと大井川のあさきぬちよもあらぬけくそうち
おるしはうゆくそのかみ方の浅川なる宅時浜と
いひやるハ越路の乳をつづりんさあよ越おのの玉井水
の沈みなりてゆきそろづいくそとなくて六波羅の
小条堂そりろじうのひまそくハ武者をもおそろし
くるおちうよね又年魚市もの衣洗ひをえて浜時を
ほうろづそのおとをもあらんさあよ大勢そりよりて
半条をもむ時ふうれしうらづとうひそればおらわうまる
うやおとりふやせそぐ矢いさせて宅浜のいるこをす
その妻あいへるやう二人のおよおもんばんやまたを

そうぬづようそうぐうつのがうてゆくべしおとこ女なれど
命をうしおろくまぞのうちのびおて
いろろ人をあひおしれんやをくありうとうろおび我
せよんをのうとうをたのづくそれが妻いを
うみていくそよすむそうぐうりのおう法
そもつづそうとひそれびまして今
まうひまいせしまの神のやよ二人の
まをそうぐての世をおくまして妻も
おそうぐうのづそうゆうそれ
訳うりのこたりこの病よ

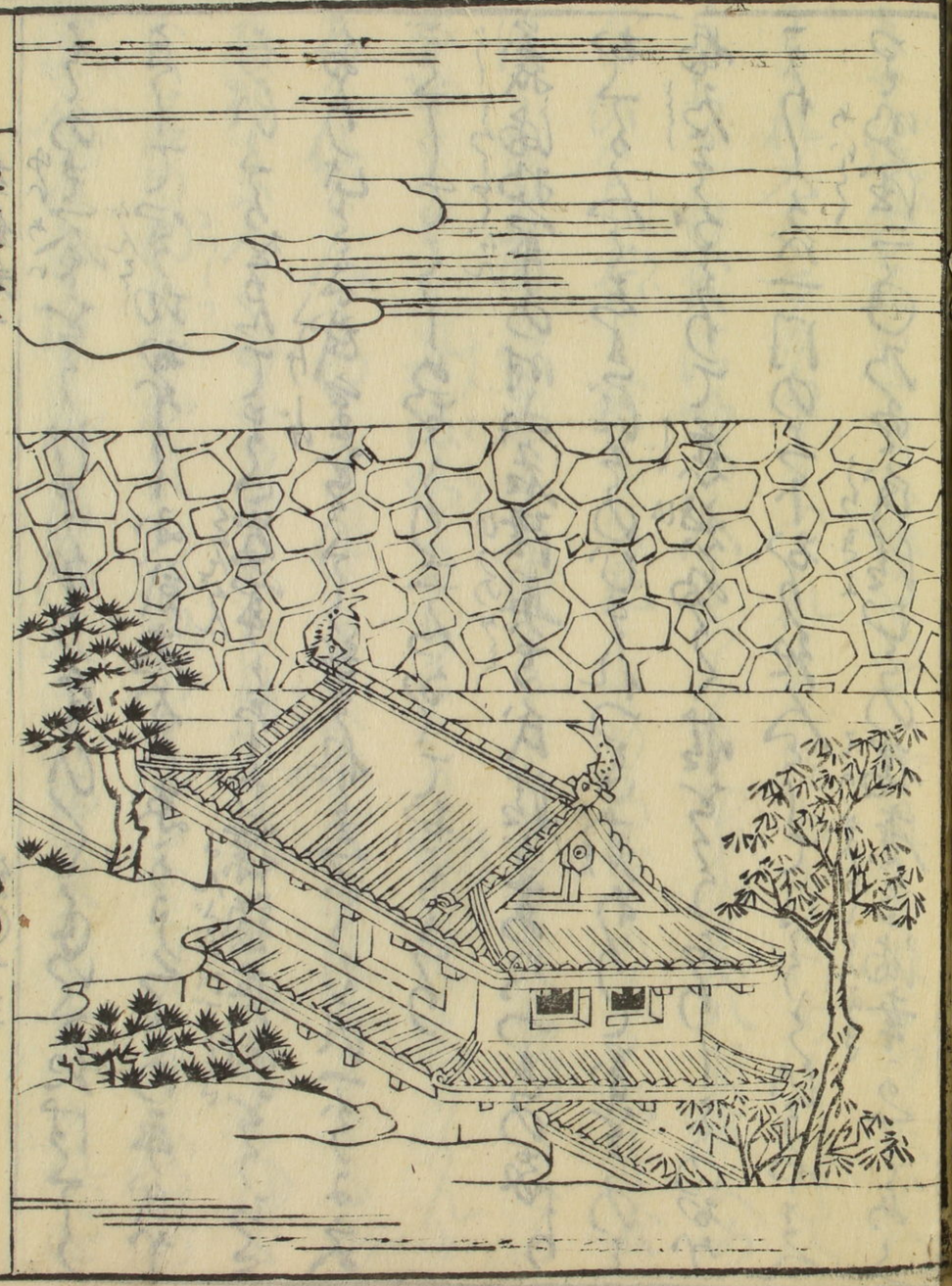
又猶金沢の二そくま越中の当領名古屋辺の時
ほその事跡発覚ありおいよ兵庫助貞義二人ふ
のそうごそのいぐぎんとて越中の二城ともそいくさを七
ありそうおく六波羅せめ
うめ武者どもこぶんぐりて敵こうろうた勢
そそでおもそろこのくびはかり下ひか若み
なのうじいまろぐくもさいぐさをもせざいあどくれん
どーてうさんそるぐさんうの女房どの氏永てい
ばそうへもそこのわれそれうへ城中そて自害せんともぐさ
ちまろはそぐ書あいくあひるれて二人のよあり

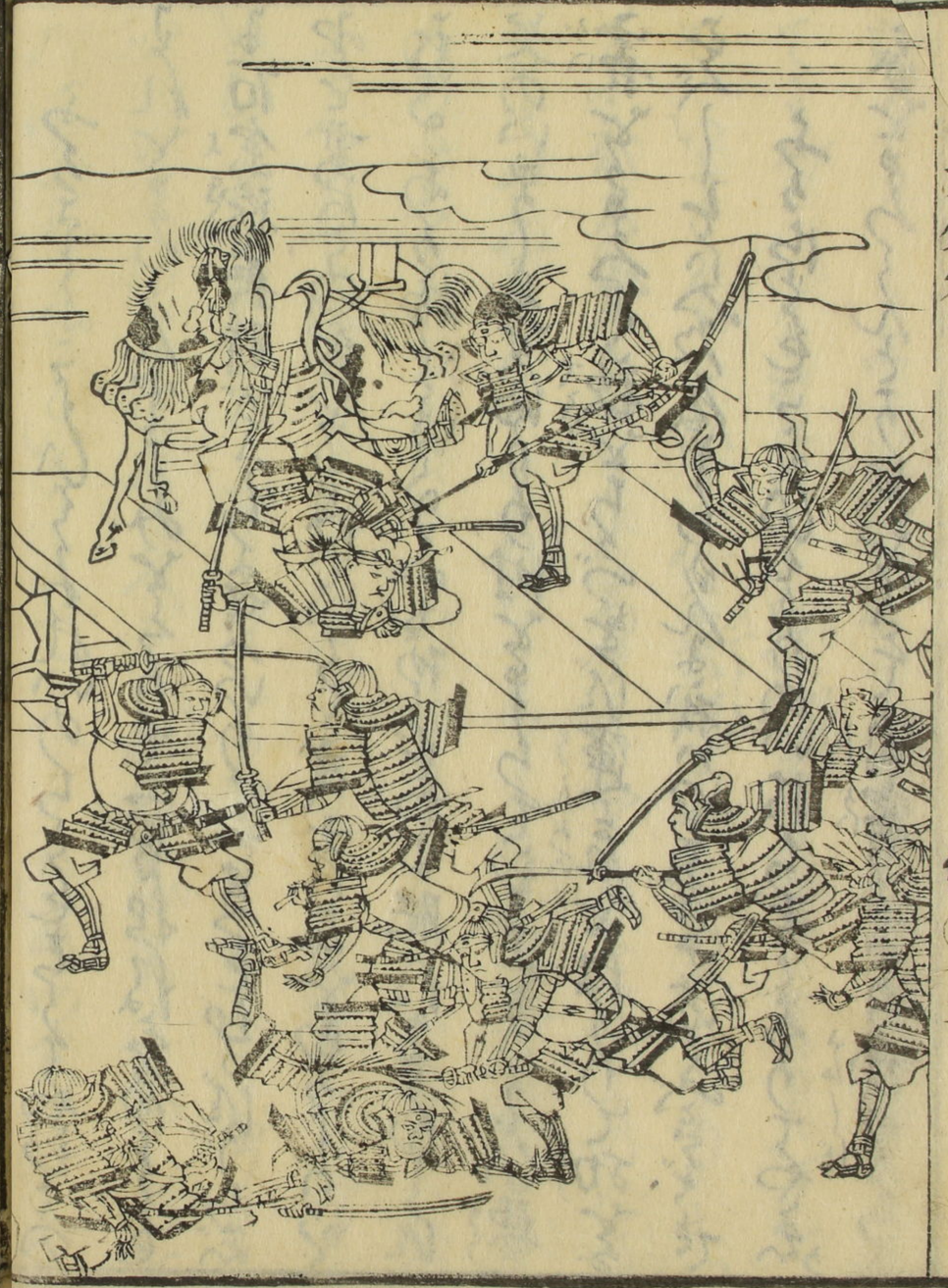
うりとく
そこなうまいことそのちきりなき
さふ赤まもりもつべくうよ箱女房のはごろもひとうみて
ぬすむもおそろなりさ人の女房いをむとんでおちゆく
ぬすとといくび誅すぞふちうさうさうされバ女房ちさうさうさ
ハつくもいろ紅よろりのせてはるの神よこびあー
なるみもふ紙をそしてとぐ一人れ女房つものどもを
あのうちよりぐさ三人の女房いまよよをとうて祝ん
ぶつつくあとくりふのおもげよろり城中よ
ハ下七十九人のもおども姫よ夫をう重一なゆうさ
らさうりて死を

みものゞ小条命よ作かれ赤夜とうひろうかいて
ふくつてもおくろうとうとうとうねるものありうをお招人なさ
せうおれくものゝはうくうをゆくうぐ大れの令参加
の城せもろうそのやまあり
ふもつうべさのおやぐとまうしおてかよみの
ぐりろうされぐつるゆうさりてきうるべさう
かりる猿会もやりろぐそのあいれ
うねどもぬろさの妻あよゆくるなをもふよかう
なれバ源経よう重て手注男
をそるぐわしまうぐりうどのかさよ

むすこうまれてうぐひすなどゝ申ごろ
てまづ〳〵の御祝百九本御物ゝをてうじ
てくいうくをてうひろめが英(ひでくに)すてうよおやうりし本
よの新大納言をおてうしろの事(ひごの)ねの
ち武宮をよびてうれいのもうくをとて
のおてまうるおもてまでさうふくゆうの好(すき)なんどの旅
ふうつうて泊をうあはをねてうごうこをうけと
いうひろめバ親のちよりひくをうんをてうつうごと
いう後来のなんぢをうへ私(わたし)の愛(あい)よびもやを
うけてうあるわといゆうめてうへ

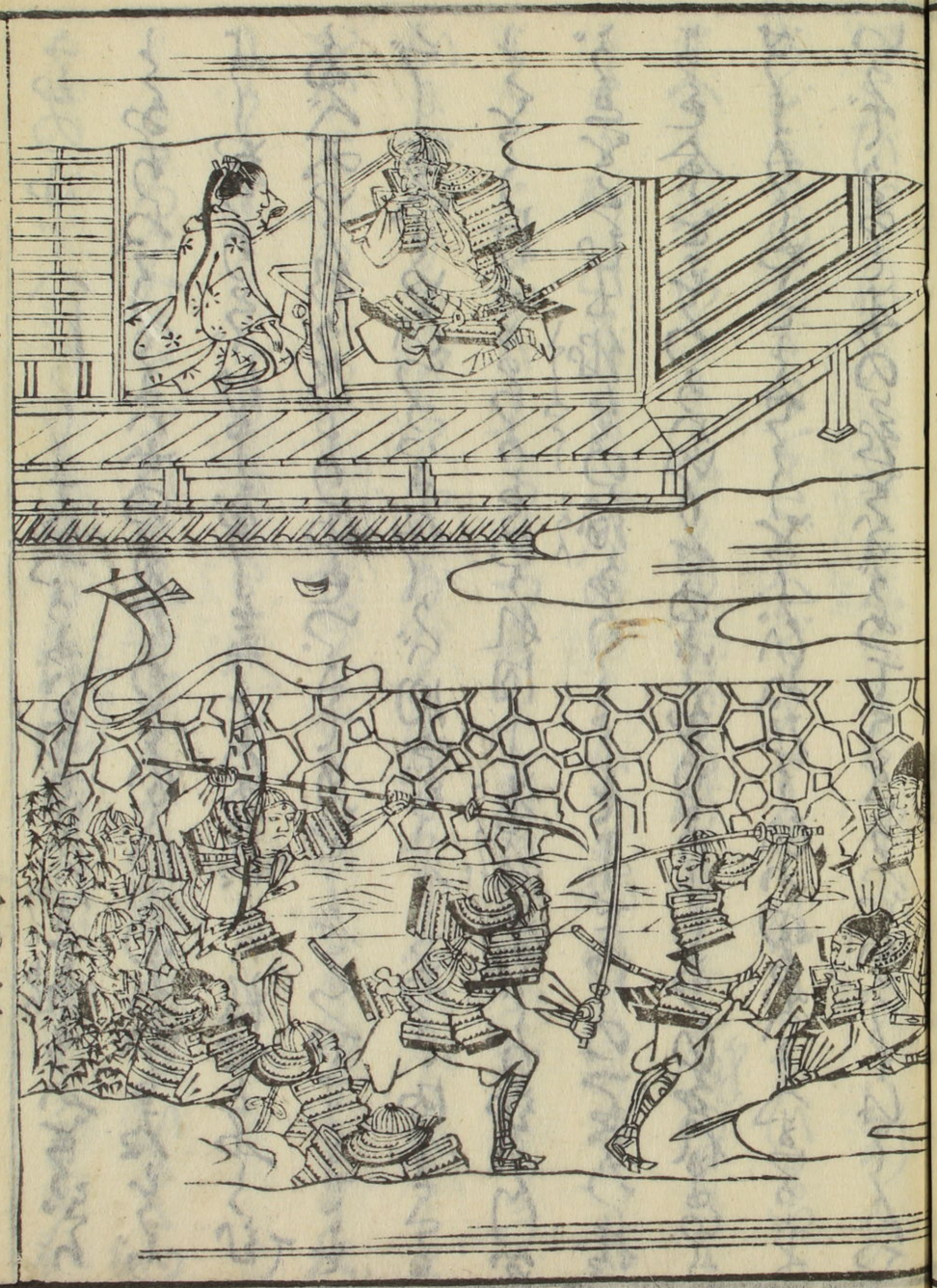
ふうさうふこてうひろめをうれいのうちをもうてやうそのの
ちんとまうこんやうみをうてうりて二男(おとこ)ねこのかを
お百余(よさ)務英時(ひでとき)がうちよせあいりて一号もうびうちぶ
かをあうこのかをうみていくく武士(もの)ふをあうとうかく
まうのあうゆうごうをめもうめよ肥(こえ)なうやう
父のいうこめをありはをまうてまうをうぐい要(よう)
書(かい)をうまうく歌(てき)をうづきびう運(うん)気をはうて効(こう)
をべしてへ名後まうのんよ我いをさてゆくぶでて
ふうはをもこてひうのいうちぞをうりてやえう
ふをまうこんとうれをそて自害(じがい)(せむらい)をうく





そのまゝ令をうけひくもいとはゝ
きて軍功あらしかば大なる家うちの事ゝ氏や
うびうるとゝんてもゝ家軍となり探題英時をうちさ
ありさゝ武室をうゝ討
ごてうてめうり二人
義治の軍の時山名陸奥
おてるんゝもまゝびそのむまれつきずありて第をのこ
ぬゝるうりて意地ぬうしものか
うりうび一門のよりおり死人ゝてうとひうやへ
つゝ治二乃を氏清
まで清ゝとうて大勢をるて
ゝれつくせゝもうふさんとう
うちまち氏清下人ゝ
るいい自害し或うち死し
清ゞゝ田たる所ゝゝをもをう
るをうゝゞ丹波ゝうち
ゝうゝ乃ゝ
乃おふへくからをそりゝ
氏清の内ゝ乱の場
軍令いゞおんゝもの

なのめまさびくもあり。くさ
そ一ものひそりものひそ
軍そくれなひて久しくそまち
ゑびさそりめちの日をそく
ふそうはそしゆくそれんぐそよあるれ
えゑのそでめ残おの名会
そ七郎とふその一番いその
めくむそなり城田佐長
ゑうちまけて一枝安人と
うさ当ねそ一ぢ時お名
うくれめうそその風系焼
ろせりうくて佐もその軍
うしくうう中よ年のこうす
なう女房そうそのふてあ
書なりのやでいくふさ
とう人のるしあさはそ
きそすへそさあしけみさり
ものくれべ女房ふうへちうふ
当ねあとあひそのちりくま
うふんそとなくやそくれ



ゑごとかりおもてにつぐべき国ふようんとおもふ
よ国をおさめ一ぢやうぐんをわたくしにふるまひ
ふむまゐの輩をそのせつさほうこう安房らくれ
ちうげをそんじふかうをとりかさいで
はくわうをころし歌をやぶれ入くみをそめ一乃み
そうわうやさわぎ国ぐも人ごうむさてはまぎ
ちうべくこれもうまでもなくこの卯ようさ
三月十日のあさくよりあくる日之夜の初
人をつぐびは佐ちのさらたてこの屍肥後川俣高大
ぜいをとりよせてせめまうち給ひ秋山紀伊守を門

で思うけるさらのをまてくんくいのそんど命をなげむ時
こそあるとさていうさゆう寿の方よ妖魂う死てのちえ
しるりさうかごふ歌の筆先うまそこの武ふる
うさまふうてそれば称教いづくまでそていう
さがいつまろうごうせのくしてむうさ
つものごくおうさんれをあさ
ひきうけてぬさまうり房の
ちを称教をつめうりはうきりて死せうこふく武田氏一
そくほろびまさ
越前金山城主柴田勝家の事あり織田信秀のむこ

め信もこのいうこうり小谷の城主こふ也十一年
の夏病果あち秀吉てきこて手紙して秀
吉さうひまれをえてそれば信長まくく称
家の小乃市のお方をひ生ながらそのかれ
よ娘の作久乃玄蕃允にすそ
さうひをあるひうさまわ
称家いさんれまそこんくの
おこい信もこれいうこうり人こもあろうよ
くく滅をおていうこうを月をせうおし
こうれば小谷のたうこうこうさぬる

秋のすゑよはなはだよりまいりてあいうめまいりてさ
より山せうちの世うちしれちごりのとをんいまさうつをん
きべくやたよいつもみよいをさんの世れもくいありそ
のへう矢ふあふじまれさんものれるあるもとうを
てやひまへまきうきさうきうくへさふいぐれね
うくさふくえへのあでろよりむさうぬちごさ
つをねの世そよむちべしてまぬうへあうて酒宴
さへめうりくまをあをぐへまありてみぐさん
中井よさづを山世のうれをさひぐありそれふ谷の
ほこと

さへめうちみうりもあをぐへまありてみぐさん
物家ころけようちうしてまの程よりを部ふう
夜の乗女をちくふきあくれ
中村文荷秋ふりくしさをのうそ
うちのこれるをまあへまりけうぐり
やさまつてさいごの男とのうるまれば客
のれ方さぐら自宅せくれ女房ふともそうえ
荷秋夜ふ夫とりけあうぐ
物家のみれへまのふよのりて上下十余人でふ殺
ふりて同じ姫ふのりうえおぐる時新人らを前あ

比賣沙紀行卷第十一

紀行第十一目錄

徵宣史人　列女傳

解損亮妻　解筱採餘

陳孝妻　復齋日記

鄭三娘　解筱採餘

高士文寶妻　倣歌日記

寶氏二女　唐書

鄧氏女　古今列女傳

王氏女　解筱採餘

玖賀媛　日本紀
やまとのみこと　大和物語
大和姫
ちんしきんつ
鎮守神記　女官記
源義経二女　平家物語
おうさうんらく
王雲洛迫嫁

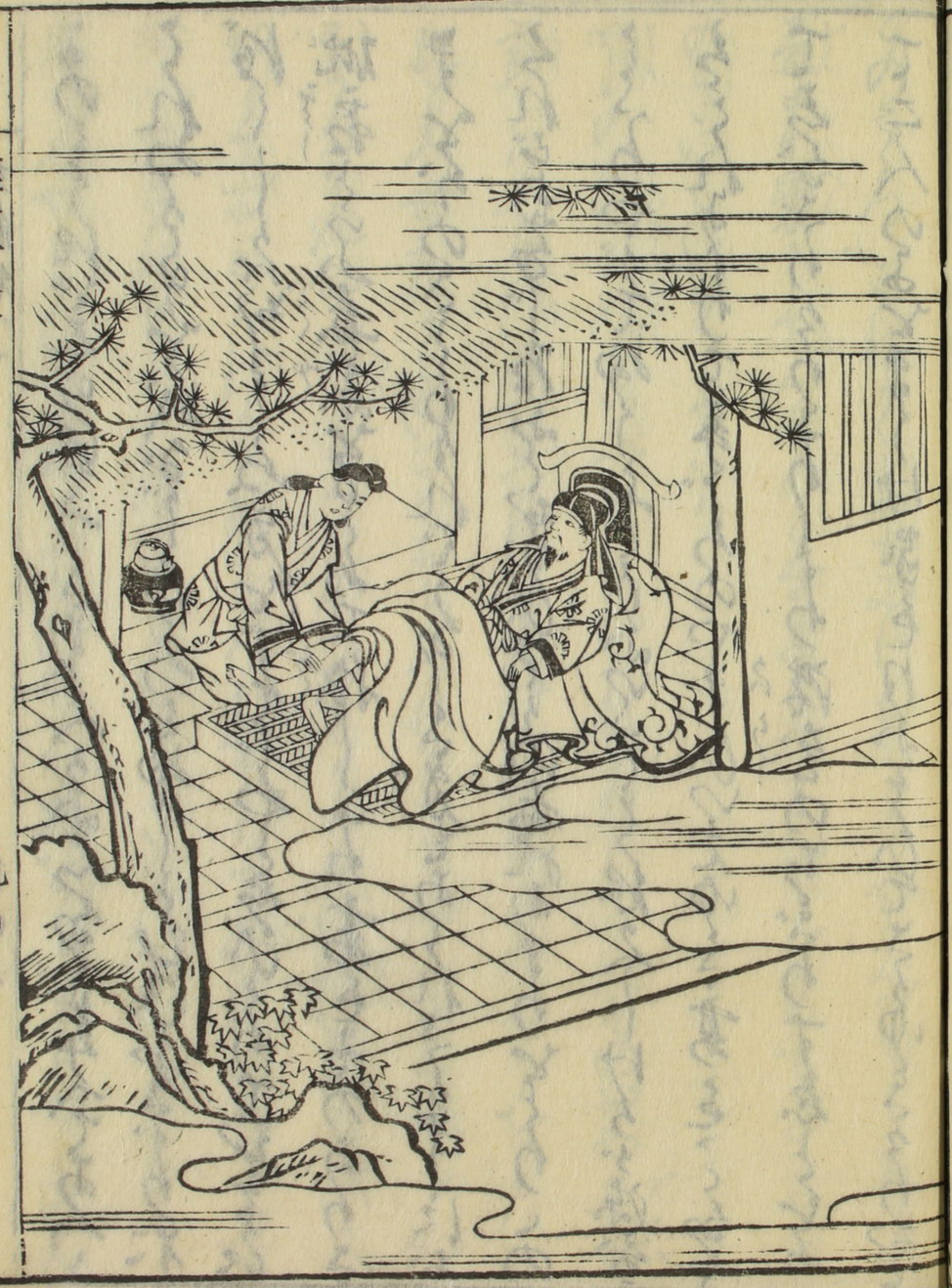
附録　古歌つゞり野

日本紀　紀行第十一　仲哀天皇の条に見えたり

いみ人の御乃宮夫人　此夫人の御方に
つぐの御のみよむ　つぐの御方に
ゆうこと紀よ　後乃世まで
よいりのいてせんきさき　入りあるべし
とうそんぐ夫人　ふたりの御の表れ
まこと世の根つとめ　ねうこと紀後まで
の表れ　ふたりの御方に
まこと世を　ふたりの御
まこと　おがめりて

ぐさ　ねうくいもそのまゝ掘しゆうぐやとりさればしんぐで
まゝ人のゆるされさりくに斎（さい）のやうなところのうち法ひ
して出るなげきさまでもわも後のいさ
のまゝれおやとをおさるべき法るまわと夫人（ふじん）ますわりさ
出けるまゝ人こうくまわりてゆるさびおつくりてん
ざーをおくこでりそのゆくよりんろくまつぐ法
ぬうこどうんむろまくべくびとこ白さ
えんまろぐさるべくんどうのこでうろんのさうぐ
うりさぐむろほうるぐべくれとうぐんのなりとさ
いまれぐめられぐと貞（てい）んのうくこ示をこんぐうち信（しん）ど

あうんのりは結もれおをうつくねさせのへの
明（めい）の解損亮（かいそんりょう）が妻（つま）貞女（ていじょ）胡廣（こくわう）むをあのり
そのむまれつき貞（てい）あうのこまこどふこのみおうさうう
めてもをわうんふんぬうし結婚（けっこん）は
於廣と同学（どうがく）のちかるあり
うさまぬくりあう時代（じだい）富（とみ）のあうせごと
よ解説（かいせつ）あのさまあり胡廣（こくわう）むをまくせのへ
つ胡廣うこりてはうこぐるべ
ろくこどもぬ男女をそれば我うく
いふるればさでめてむとのひうそのへ



門の漆ぬりの重箱その氏さこうやびたるそのおやく
ゑんを縁をそこひまぬくいもぐあるうけうう
ちよ陳家のもりくびあるそやまいをそくわ素のちくん
うきうよりひろしが体ぐらもちをそてちきりをそちやん
うきうよりひろしが体ぐらもちをそてちきりをそちやん
うきうよりひろしが体ぐらもちをそてちきりをそちや

ぞ色のうつくしきをちりばめ、まなこ
うへをそのかぎりてつめよとうつくしみ
ねよとをかしうたみざさいまの人あまわろ
めのちゝ抱(だ)きとりてたぐやつまこなつれ
はくりもあくまふなわそ
ゆふぐれ山ぶみをしてそのまゝ
ゐ一夏女のえもあらうて碑(ひ)をさて
抱(だ)きとりてそとふくひろの沖のんくまでまのれ
そそとそんざれうも更のくあよまぬのつもなる女よれ
まひくうびねくろかをゆべうさかとりら

ごゝ一妻(さい)年(ねん)よくれうまの多をおゝ海ざんたゝの
ハくうちのがりてあのつちとりふくゝ名の人つる
そぐりてあゝなの人なりうぐなんざるめ
とくそくけるまゝびうめる我(わ)ゝ綱常(こうじょう)をを
てんとなるめ
明(めん)の章文(しょうぶん)貴(き)う妻(さい)あくをの食(しょく)をうぐ夫(ふ)婦(ふう)
つそいまぐその礼をうさぐつうる文章やまひな
あゝていまをうぐうぬあるゝおりひうれぐう
乃あよゆさておくまあぐやうて毎のゝひなげさ
なりうはくゆうさつをうぐれぐあるぐうよいひうれぐ

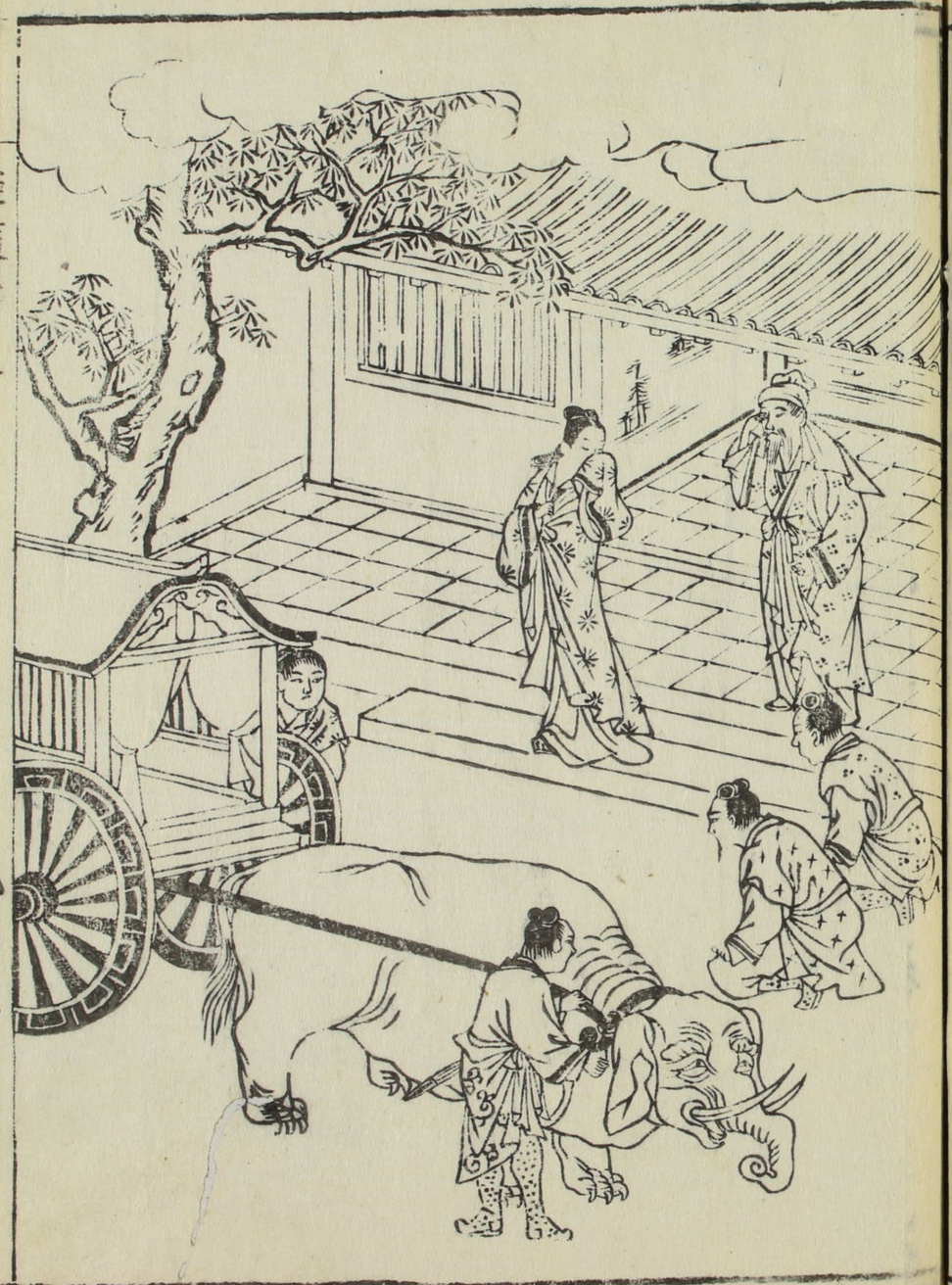
ちうなくてをうりやうもとめ章氏まいくうりうとさ
又宮さへあくてとくそうそでうへ久宮あありり
けうぐ多もくるこどかうりぬいまあわしやうり山寺
とくふわとくれ菜礼まりをもをねんくうよりるくうやく
てめちよまあおのくまをうくんばあのりいとくしびて
うづさそでくうくふくくなくくひやくおくりく
なりくんばさうべさ隙をとめてをの田せさ治てつあま
くやたへしてその官礼紀侍帥まびてのかりお表と
韋倫とふ母ゆくく巻をうくせりけくうて月やとく
ありりてありくんばをを孫じてんづをとのべりふん

いふれなまりと世をさうふ一関いんてえくりた
まうふまれまよりくそくれたのこありてうくその
父ゆれくり我いをうそうくみくをやさび一
さくりの参よ和をあり一月をくしん名をりて我い
月をはりうふ山世うなくき人のたまもちづうやを
くりのんといふんぐへりり郷三娘う節よ引しうハれ
くくれゆうさぐれ郷をそのてたうくうくみあまべ
なりう文宴が書あのやうあをハ一月見うつ
ありちぐりあんばりひうう文面の縁をむすびう
がいまぐあいくどーてれくくる一生んぐ

をまねわてをくれる女房(にょうぼう)表(おもて)まであづり貞節(ていせつ)の名(な)を売(うり)らるるものあり礼(れい)なんどをかくごとくに
ねだるべきにあらずこれ女(おんな)の死(し)をもとむるものあるべきわざ
狼(ろう)をさて女の気(き)ようきくうりこと月みて
こころうねようの報(ほう)あることをいわざるこの死(し)をもとめ
も女まの報(ほう)をさてうらうらしてうかうりてのちに
ぬぐとかくうわちんばいまでは女(おんな)さるべき
まごその礼(れい)よくうるべきうれを女八一人な
ふくうひくおうちう物(もの)まべんねだるべからず
どんにすべきゆうえうひめうとうれてうかと

よろこびものんようびありてそのんにし
をくるもの恩(おん)にいさぎよしとも礼(れい)を
えん弟(ろう)をさてみぶくおやばうものありひざに
なんるふ者のつうちうがれざるべからず
よろうざるなり
唐(とう)の玄孫(げんそん)奉天(ほうてん)の縣(あがた)
なりあやしれたびめよなり
おしあらしまなれともうわしもうつ
ふうをもうさうてもうも世のつねるんかか
そのうち温飽(おんぽう)せうおうかのりて

あくりそも男女納言(なごん)
なのもん(十九)いりうとゝ中
わうふるけうりこもうふ
うつゝてむさあしさ
しくれとおのへくんき
のこゝろと一そよりひ
おうの若(わか)ん(君)くれバわ
いもぐされ(ど)ゝ(君)のく
くあうやくらさらぐ
づさてくびうらくぬと
しぐけりてやぶれ(ど)ゝ
うらそくいふうふりう
くれかうしそのうぢ
恐(おそ)ありでくみうぢ
これが門(かど)同(どう)ゝ
なぐくゆうさせの
家(いへ)の奥(おく)列(れつ)
いふものあうそむさそ
ゐてくるれでおく
おとうれくのとうは



はうそんどもまた則そのうちとおりてそこらどんな
ものそへときさてこれをゆのり〜せうわ翁氏そこ
へべきたまへとうひそれぞこ一まわりそこよみてこひとを
うぐいそのうくもまぐうくちやこうひとりてげふぐくち
きうそこげそうんそうふ
しもむうへのくそうひそれ
うへしそうあをうこそつうるまそうあう
むま則まりこうひせうこそうくまりうふ
すきゆまた則ちをうぐわ、ふとうねてゃの
あゆひうへうひとあうひとうぐめてぐはの人はとうおくて

我ものごとを四海(よつのうみ)のごとくはゆづりあひさまめぬまだいふてこそびんぼうがみえねどもいつまでもとぐとうらべまてなりわらひいろれがおもてもちさまあつんはいろあそびに一ぞくまでもとぐとうらべこゝろそれもんようあそびやうにはいりくうひまこめてうくそうらふ爰(ここ)ととうひすてくなもくうれつまあつまちのりてゆきうりゆきうつくしまうとそれようすこと氏うさまあぐてうそれべうれ内(うち)へすてくぞれてうやくおとこへうそうわ

明(あく)の春婿(はるむこ)のごろ五氏(ごじ)れ到(いた)女(むすめ)あり其(その)親(おや)ともいわ

ちくおあうさうへくせうとうそん

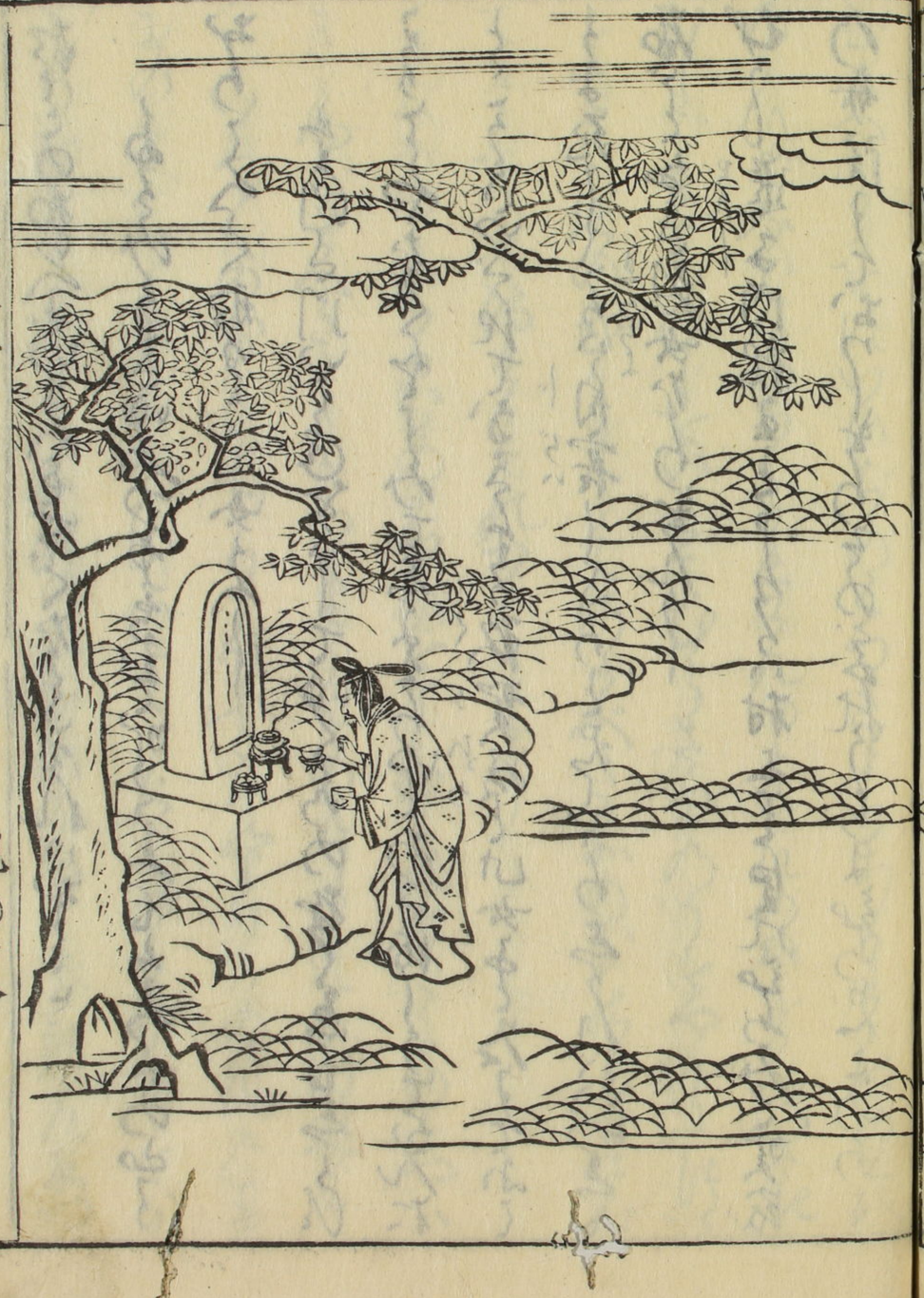
かうわくれバルまるろむをものろけるを人へはそうう

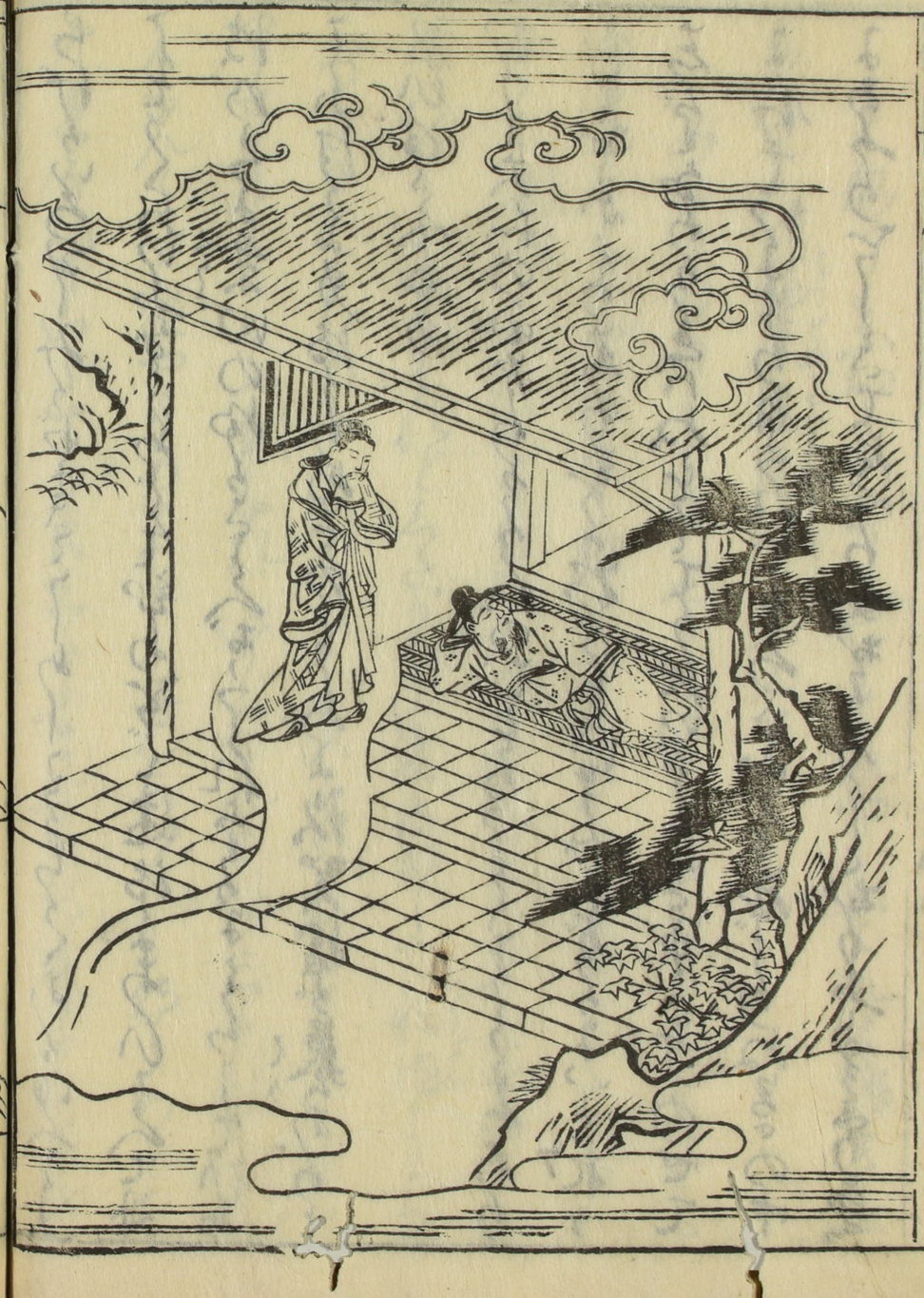
ふ[illegible]ぬくなうこのるれくうはりるこ

もなわくれバ髪あげかんざしせよと人すゝめるれど

いをいてもさぐびれあるぐうそこのよありひも

てくうさけをふうあゆくとをあゝはりこやうに





おとこのおいくどいつくをもせずくなりそうしばおとこ
あるみうさのよつあもぞかくあもそのみう
おうくおとこ　女うへ
きりさいてもをそしてゆくみのあくあもあびた
うちやなくをとみてあさはうわいてるんた
とこうさいぐれておうさうをうろ政賀婦（くちひろ）と山女（やまおんな）をとそおふし
うよ死（ど）しくうら自害（じがい）しくうちうればいづもも
あでとをさ処女（もろびよ）なわきんうろ村上を望れもみこ賀茂
むう一選（せん）な門部（もんべ）とうくうろ政賀婦（くちひろ）と山女（やまおんな）をとそおふし
の称院うておうをわそのそれうちよもあうんこのあう

むあへかうとおいひちのくうまもわあうとうあ人
のうひまみてくやあくうをもんのかどういれ
むうこよすむをまそてむうさよあうをうう
くてうれのもさてけうべさふのうれりせう
てうさうせうくうれつくうう
こうのうちもものまりひをすもれをくまのくわ
さあうそのうちうくをとくうそのうう選な門部を
うくあうくとくうくうつもあうちうまりあくうの風人吉
いうくのもいさどうちうまりあくうの風人吉
まのこうみとうみのひていさくうたこうはんくもう
うりをうとうやまいはのはうのまようあうた来つ

よいひとり女房よまのびくおいひとりみけるわこのかよ
いしあへどこひちんひちんしばし女
まこうひとりもおもてもそれそれそれそれそれみてまこがいさわちんみこた
もいいのようなりもん不郎こいふまうおこれおる
とりそれおやこそひきうおもこちぬいとハ
うちとあまうをいひをうしべ下郎
ちでまいそのふりをこりけるおお
こうそれわくみてはみよおこさわちんふ
こまてし

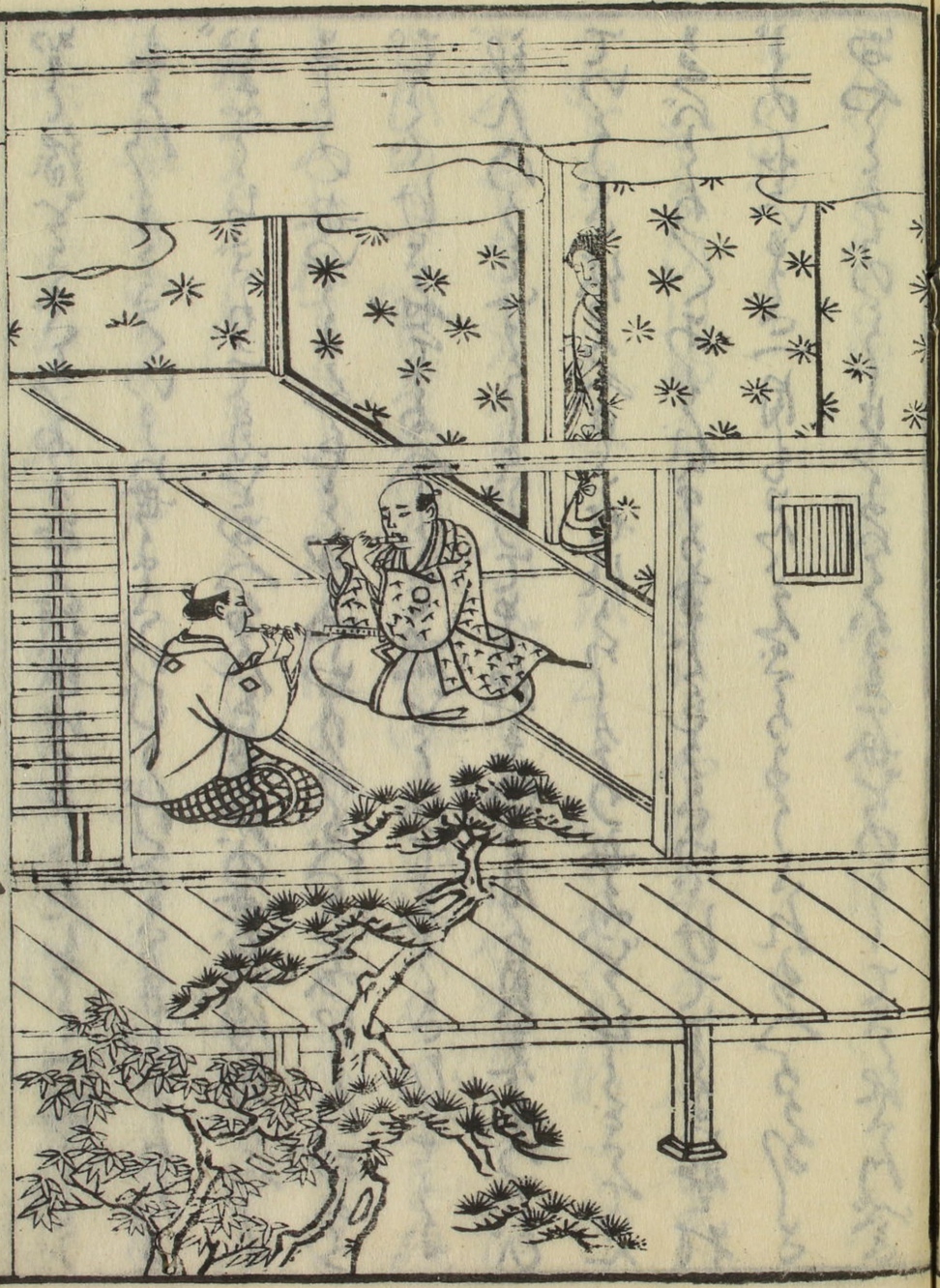
花馬(はなうま)に義郎(よしろう)のむすめありといひしを
さるさわそれ人(りんじん)猿田彦(さるたひこ)あづまをくれけり
手代のこぶれ義郎うち
それむとあをもうこさんわいろ
捨べくて六条堀川の家へ改(あらた)
てわちやそれいふ船(ふね)
そこそ改(あらた)くて父のあ
女ごうそれをのるし共
おのこなんで父のそもそ
さわさんご女なりゆよすて

よちごとそれていうあとうう男とこ
うあの父のは名をもをごぼいつせるんへうるん
いつまやうあまが我をろてお庵まいつせよと
ありそれい政あいまかくべふいくび庵もうくる
てそまいわこくとるんがおれうまてお
をねこをそかよむひてお供せれけをあ
こうまごくまそうごてあげうるまべさひうみきう
うまてさごうかさみくとすめうきてはよ
こうりまこ叉は前とうもをいのまも墓
乃長者うむもの延命うふむまれくわ第那やこと

おうこと紀之帝西源をは義平いこやこふくもうれひうの
中そ大夫朝長こと大夫朝長こと清流乳母おいつきまこうこと
おごようもともいこうちみくんうひ朝長いこごは
あひれいも墓のもごりふく自害をうこの
それも尾張のおものの国元の家ぐこあう
うくまそれもち平家の清流家こふ
そのおの流の平清盛こけごりまも墓は
て朝長ご墓をおごできびうてお
ひおあをしまふかわけうごそのあわこまるんて我
もの風乃まるれで女なわこもつあよつもたと

けらんぐ（ママ）ちゃうくうまんまわいせんて佐藤
つまてもあがたよなくてくやくそうかうそ長
母をけうくまるぐさあてくぐちをそこちゆうぐ
さわうそをんをゆうぐそうあうそのびく
おくげうかうそこつ権助（くわんすけ）うぬぐりけて
月をるぐそうせうちあくれりよくぬのまきた
女ぐてんのくひうそをびけさくれまされ人い
なうわうる
永尿（えいにょう）の比（ころ）ふんよすこけ（ママ）家（うち）ふた七条（しちでう）域（あたり）そんん
の縁（ふち）わりうそこら世（よ）すぐらくれんざ（ママ）ほうひぐ（ママ）くらの

なうそんをそせまもうくうれさも女房（にょうぼう）なりん（ママ）のたま
私のみれ景（けい）な頁（ページ）光（こう）久（ひさ）先生（せんせい）とふ爺（ちゝ）のとてのわう
けうそうして笹（ささ）ひうそうけく問（とん）かなく
ひようちうけく問（とん）かなくりうそうりぬありうそ質（しち）
光（こう）うくおそて左をう妹（いもと）そんくりかざりうくも
でゆぐひて左をようひうそうの妹をえさ世
ようれをくりのをもくわて仕人と世をうざりよすむ
ぐ（ママ）とのひれいたなりひもうぬをうけのう
をのれりうの流方（ながれかた）等（など）わの今う妹（いもと）まつすべ（ママ）と
いうくりのようぐうくうまんてそ（ママ）ほぐ



ふりそゝひろう分わく見えもぐさとなりぐく分のまゝいでありてつゐまことにけう人見えぐまうぐさんくるぬふうまひうをうれぼよそぐきうてあぐさうわあくこうわされど見えなぐうくとふくうまてきこまあのくてたをぐ分んのあうわてこみうのお房をうぐひうてうかてうのうちよへまをきうわお房へ中りくふまをうぐひ海ぐきんぐありよてほこれのくこれかまでお月をてくうまをうきやとひさてあうわされこあまさひぐきんぐうの赤よおうつきて見えよういのけうかうれこの